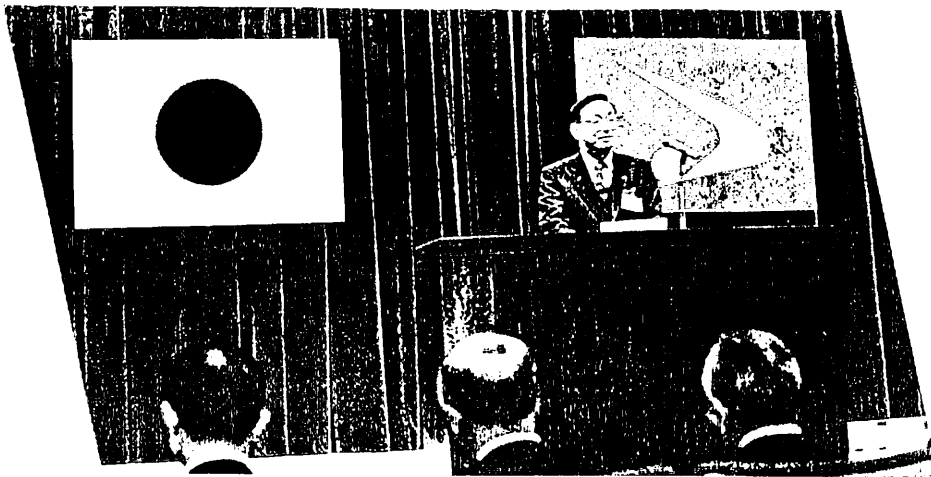


10年度 秋田県教育研究奨励賞 第13回 秋田県教育研究発表会



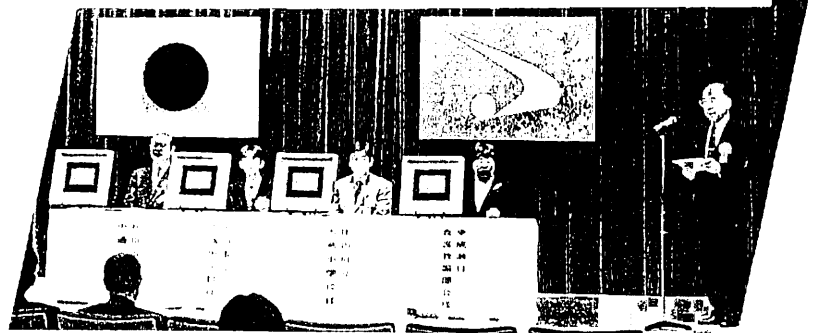
「開会式」であいさつする
伊藤所長

総合教育センターだより

◇—も く じ—◇

- ・第13回秋田県教育研究発表会 …… 1
- ・学校とともに、早期の対応を…… 2
- ・平成11年度の研修講座紹介 …… 3
- ・1年間の研修を終えるに当たって… 3

10年度 秋田県教育研究奨励賞授賞式 第13回 秋田県教育研究発表会



教育研究奨励賞授賞式

平成11年3月12日発行

秋田県総合教育センター

〒010-0101 南秋田郡天王町天王字追分西29番地の76

TEL 018 (873) 7200 (代表)

FAX 018 (873) 7201

ホームページのアドレス

<http://www.edu-c.pref.akita.jp/>

すこやか電話相談 018 (873) 7206

〃 0120-377804 (フリーダイヤル)

インターネット接続 018 (872) 1065

学習指導案
レファレンスサービス 018 (873) 7210 (FAX)

パソコン通信 018 (873) 7207

第13回秋田県教育研究発表会



次長兼教科研修部長 高橋 準一



講演される千葉弘子氏

はじめに

「平成10年度秋田県教育研究奨励賞授賞式並びに第13回秋田県教育研究発表会」が、平成11年2月9日(火)・10日(水)の二日間、県総合教育センターを会場に開催された。

この発表会は、県内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特殊教育学校、教育機関における研究成果を互いに交流し合うことによって、本県教育の振興を図ることを目的としているものである。

例年より雪が多く、天気が心配されたが、まずまずの状態、他県からの参加を含め、延べ約850名の参加者を得て、盛会裡に終えることができた。

県内教職員の発表

県内教職員の発表数は、総計70本であった。

校種別の内訳は、小学校関係者27、中学校関係者18、高等学校関係者9、特殊教育学校関係11である。これに市町村教育研究所研修員の共同研究と、本センター研修部の4発表が加わる。

学習指導要領の改訂時期と重なり、研究テーマが絞りにくかったこともあってか、応募発表の本数は例年より若干少なかったものの、いずれの発表も児童生徒・学校・地域の実態を踏まえた堅実な内容で、秋田県教職員の教育に対するひたむきな情熱を感じさせるものであった。その中でも特殊教育学校関係教員の応募数が例年を大きく上回っており、その研究意欲は特筆される。

また、県教育委員会の本年度教員研修自主研修の新機軸である「チャレンジ研修」の体験発表は多くの関心を集めていた。

総合教育センター各研修部の発表

「一人一人の思いをはぐくみ、豊かで特色ある学校の創造」を基本研究課題とする本センター各研修部の研究発表は次のとおりである。

○教職研修部

「社会の変化に対応した『開かれた学校』の在り方」

○教科研修部

「一人一人の学びが高まる『学び合い』の在り方」

○情報教育研修部

「児童生徒の主体的な学習活動を促進するインターネット活用の在り方」(第二年次)

○特殊教育・相談研修部

「タイプや状態に応じた不登校児童生徒への対応」
いずれの研究も、現在、教育課題とされているものを見すえながらも、県内の学校が抱えている問題の解決に直結するものになればと考えられたものである。くわしくは、本年度末に発行配布される「研究紀要」をご参照いただければ幸いである。

記念講演

本年度の記念講演は、湯沢市出身で、現在長野県教育委員であり、長野冬季オリンピック・パラリンピック組織委員会委員・選手村副村長としてご活躍された千葉弘子氏による「オリンピックと私」であった。秋田県民には「距離スキーの高橋弘子」として記憶されている人が圧倒的に多いことと思われる。

“Think globally, act locally.”を、文字通り実践しておられる方のお話として、我々の胸に重く響き、教職という仕事にとっても珠玉の言葉がちりばめられていた。

「経験は自信につながる…子供の体験から宝を引き出してやるのは大人の役割…子供の生活に点・節目をたくさん作ってやる。人はそれをふくらまし、維持していくことを課題にして生きていく…」

「…一言付け加えて、その気にさせる…」「今日を大事に、毎日毎日を大切に…」「私にはスランプがなかった。スランプと考えることが、悩みをより深くする。」などなど。

学校とともに、早期の対応を

特殊教育・相談研修部長 齋藤 宣子



「スクールカウンセラー」や「心の教室相談員」の配置、「適応指導教室」の増設、電話相談「すこやか電話」のフリーダイヤル化など、児童生徒・保護者のための相談・支援のシステムが整備され、いろいろな施策が以前にも増して構じられている。

当教育センターも、その一端としての役割を担うべく「教育相談」の一層の充実に努めている。

今年度、4月から1月までの教育相談件数は、次のようになっている。

| | 生徒指導関係 | 特殊教育関係 |
|------|--------|--------|
| 来所相談 | 133件 | 82件 |
| 電話相談 | 154件 | 20件 |

生徒指導関係では、不登校に関する相談が最も多く、来所相談133件の内110件、電話相談154件の内77件をしめている。

最近では、初期の段階での相談が比較的多く、「事態を長びかせずにすんだ」という嬉しい報告をしばしば聞くようになった。しかし、まだ対応に苦慮しているケースが多い。

特殊教育関係では、知的障害の児童生徒に関する相談が多い。教育・養育に関する「教育相談」と並行して知能検査等を実施し、要望に応じて、日々の

対応や教育的処遇の資料として「検査・相談報告書」を学校に送付している。

ここ数年感じることだが、通常学級に在籍している軽度の知的遅れや発達のアンバランスなどが原因で不応状態、あるいは不登校傾向に陥っている児童生徒の相談が目立つように思う。これらの相談は本来、個別指導など特別な配慮が必要と思われるケースである。

不登校や不応などの相談は依然多いが、明るいきざしが確かに見える思いもする。それは、相談のきっかけやその過程に学校が一層深く関わるようになったことである。例えば、担任と保護者（子供も）がそろって相談に訪れるケースが多くなってきた。そして、相談の見通しを共有し、その経過に学校が関心を寄せ続けてくれるようになってきた。

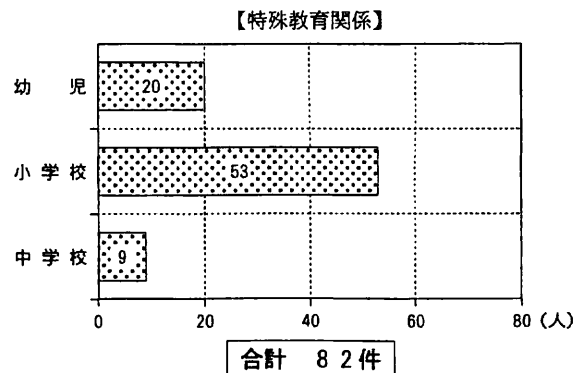
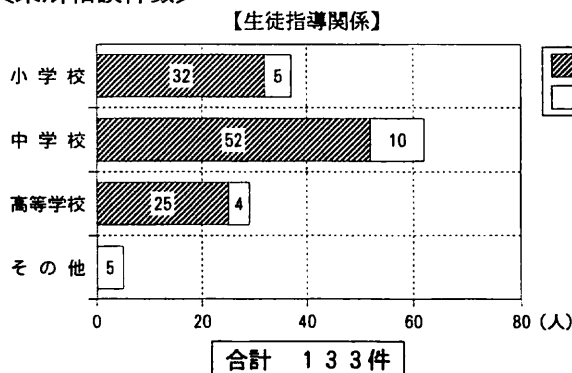
「連携」とは言うに易いが、互いの信頼関係と子供に対する熱意なくしてできないものと再認識させられている。

この度、当教育センターでは、「タイプや状態に応じた不登校児童生徒への対応」として2年間の研究を紀要にまとめた。（第30集4分冊の4）直接子供に接する先生方に活用していただけることを願っている。（今年度内に各校に配布予定）

平成10年度 教育相談実施状況

<来所相談件数>

(平成10年4月～平成11年1月)



<電話相談件数>

| 幼児 | 小学校 | 中学校 | 高等学校 | その他 | 合計 |
|----|-----|-----|------|-----|-----|
| 12 | 47 | 43 | 67 | 5 | 174 |

平成11年度の研修講座紹介 — 魅力ある講座を目指して —

次年度の研修講座は、「秋田県教職員研修体系」に基づき、それぞれのライフステージに応じて適切な時期に必要な研修が受けられるように編成するとともに、各学校や教職員のニーズを踏まえ、教育改革など国や県の教育課題に応え得るものとなるよう配慮しています。

平成10年度に総合教育センターで実施した研修講座は、講座数が136講座、講座延べ日数が383日、受講実人数が4,346人、受講延べ人数は12,721人でした。

平成11年度は、136講座を計画しており、4,869人の受講者を見込んでおります。

平成11年度の研修講座の特色は次のとおりです。

- ①「生きる力」の育成や個に応じた教育が重視されていることから、総合的な学習、社会貢献活動、チームティーチング、環境教育等の研修を充実します。
- ②初任者研修講座の研修内容を抜本的に見直し、初任者がより一層実践的指導力を身につけられるように工夫します。
- ③インターネットの急速な普及により、従来のパソコン通信の研修講座を改編し、インターネットに関する内容を充実します。

④教職経験者（10年経過）研修講座は、受講対象者が大幅に増えることから、施設設備や運営の関係上、平成11年度は2班編成とします。

⑤「公開講演」を広く県民に開放します。予定の公開講演は次のとおりです。

『「生きる力」と情報教育』

（大阪教育大学・助教授 田中博之）

「放送の目から見た教育の姿」

（秋田放送報道局・アナウンス部長 依本悟）

「浜辺の歌と成田為三の世界」

（前浜辺の歌音楽館長 金新佐久）

「ふるさと探訪—秋田の地名—」

（秋田工業高等専門学校・名誉教授 斎藤藤）

「言葉は心」

（NHKセンター・エグゼクティブアナウンサー 杉本泰夫）

「南極大陸とオーロラに夢をはせて」

（山梨大学・助教授 竹内智）

1年間の研修を終えるに当たって

研修の成果を生かして

研修員 永瀬 伸 昭

今年度、秋田県総合教育センターにおける1年間の研修の機会を得て、理科の学習指導に関する研究を行うことができました。

これまでは、授業の中に取り入れた工夫が本当に生徒の理解に結び付いているのか、じっくり検討することもなく過ごしてきました。

今回の研修では、生徒自らの力で、観察・実験ができるように、確かな技能を身に付けさせることをねらいとして、理科の学習で使う実験器具を工夫し、検証授業を行いました。その結果、生徒の実態を踏まえた器具の工夫が、観察・実験のための技能の定着に結びつくことを確認することができました。

新年度から、再び生徒とともに授業を行っていきます。この1年間に身に付けた研修の成果を生かし、今まで以上に自信を持って授業にのぞみ、生徒に接していけるものと確信しているところです。

今回の研修に送り出されました関係の皆様深く感謝するとともに、厚くお礼申し上げます。

思いを新たに

研修員 小野 あき子

今年度、不登校をテーマに1年間研修をする機会を与えていただきました。自分自身ここ何年か不登校の生徒との関わりが続いていましたが、今回、不登校に関するさまざまな研究に触れることができたと同時に、実際の教育相談の様子を目の当たりにし、改めてたくさんのことを学ばせていただきました。

不登校児童生徒数が増え続け、特に中学校段階で不登校生徒が急増していることを踏まえ、中学校が子供たちの目にどう映っているのかを探るため、中学校1年生を対象に調査を行ってみました。そこから浮かび上がってきたのは、意外にも、時には登校がおっくうだなと感じることはあっても、学校生活の中にしっかり自分の楽しみを見出して頑張っている子供たちの前向きな姿でした。

子供たちは決して学校の存在を拒否しているのではないということに、勇気づけられ、彼らとともに歩んでいきたいという思いを新たにしました。

貴重な機会をいただいたことに感謝しています。